

平成28年No.17 鉄骨構造

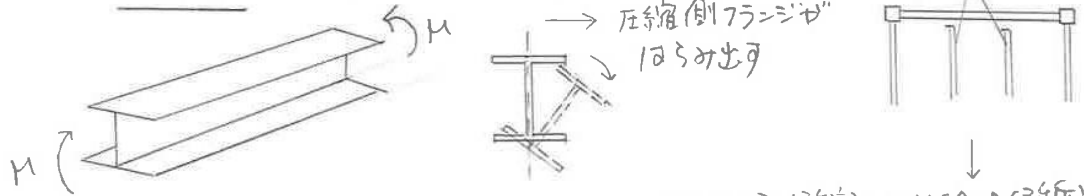
1. 梁の保有耐力横補剛 → SN400B材よりSN490B材の横補剛数が多くなる必要
2. H形断面圧縮材の許容応力度 → 弱軸回りの断面二次半径を用いて計算する
3. SN400B材とSN490B材を用いた梁 → 曲げ剛性に余裕がある梁においてはSN490B材を用いる事で梁せいを小さくできる
4. H形断面梁のフランジの局部座屈 → 幅厚比が小さいほど局部座屈しにくい

○ 梁の保有耐力横補剛

→ 梁が十分な変形能力を發揮するまで(全塑性モメントに達するまで)

横座屈(2a)のように剛性を補うもの

横補剛材



SN400B(強度) < SN490B(強度)

横補剛数(2) ← はさみ出可 → 作用するモメント(1)

○ SN400B材とSN490B材を用いた梁

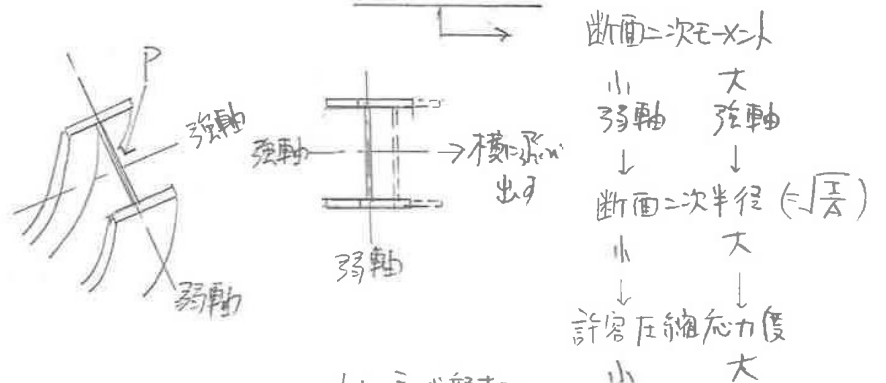
基準強度(板厚 ≤ 40mm) 部材の許容曲げモメント

SN400B 235 N/mm² → 許容応力度(1) × 断面係数(2)(大)

SN490B 325 N/mm² → " (大) × " (1)

※ 使用上の支障が起らない確認が必要 梁せいを小さくできる ←

○ H形断面圧縮材の許容応力度



小さいフランジ部材の許容応力度となる

○ H形断面梁のフランジの局部座屈

